

平成30年6月12日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370428

研究課題名(和文) ビルマ古典歌謡における伝承と創作：写本と楽譜の分析を中心として

研究課題名(英文) Transmission and creation of Burmese classical songs with special reference to manuscripts and notations

研究代表者

井上 さゆり (Inoue, Sayuri)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：40447503

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「タチンジー(大歌謡)」と総称されるビルマ古典歌謡の伝承と創作の関係を明らかにした。報告者は研究期間中に現地調査を4回実施し、楽譜の収集と撮影、伝承の実態の記録と分析を行った。手書き楽譜を大量に残し、楽譜を用いた教授法も確立させた、著名な豎琴奏者である故ウー・ミンマウンの手書き楽譜の調査撮影を実施し、合計約3200枚の楽譜画像を撮影した。それらのデータベース化と分析を行い、楽譜をジャンルごとに分類し、同一曲のバリエーションを整理した。書承と口承の組合せによって伝承が為される様とその方法について明らかにし、伝承の中で新たな創作が為されている様についても提示した。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed the relationship between transmission and creation of thachingyi or Burmese classical songs. I did field research four times. I collected and took photos of handwritten notations of late U Myint Maung who was an outstanding harpist. He left a large amount of handwritten notation. I took over three thousand photos of his notations. I made a database of them and analyzed to label their genre and variations for same songs. I explored the method of oral and written transmission of Burmese classical music. Then I demonstrated how the new creation was done.

研究分野：ビルマ音楽

キーワード：ビルマ ミャンマー 古典歌謡 伝承 写本 貝葉 口頭伝承 楽譜

1. 研究開始当初の背景

報告者は平成 16 年度以降、科研費補助金によって一貫してビルマ古典歌謡に関する歴史文書、一次資料の調査収集、音楽実践の体得的調査を行ってきた。これまでの科研費研究は次の通りである。平成 16 - 18 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「ビルマ歌謡創作の営為: 18 - 19 世紀における歌謡創作概念の分析を中心として」。平成 19 - 21 年度若手研究(B)「ビルマ歌謡におけるジャンル形成: 18 - 19 世紀の歌謡創作技法の分析を中心として」。平成 22 - 25 年度若手研究(B)「ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成: 歌謡集写本と旋律の分析を通して」。平成 22 年度研究成果公開促進費 学術図書、『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』、大阪大学出版会。平成 24 - 25 年度研究成果公開促進費 学術図書、『*The Formation of Genre in Burmese Classical Song*』、大阪大学出版会。

ビルマ古典歌謡に関する従来の研究は、現地文学研究者による文学的観点からの分析、もしくは1960年代に行われた国外の音楽学者による調律・音階の分析に留まってきた。文学的観点からの研究は、主に作品の列挙と記述、および作品の歴史的背景の分析に終始しており、作品の歴史的・社会的背景への位置づけが目的とされてきたと言える。ビルマ文学・歌謡については、作品の列挙と解説に終始した Hpe Maung Tin の『ミャンマー文学史』(1947年)、歌謡を中心に扱ってはいるものの文学史と同じ形式の Myint Kyi の『ミャンマー歌謡の芸術的文学の歴史』(2001年)が主要な研究となっている。そこでは、作品の背景は述べられるものの、作品そのものの分析は行われず、印象論の傾向が否めない。

一方、1960年代にわずかな欧米の研究者によって音楽構造の分析が行われたが(Becker 1968, Garfias 1975, Williamson 2000)、いずれも古典歌謡の楽器伴奏を分析したものであり、歌詞や旋律の分析は行われていない。その後、国外の研究者が現れてきたのは2000年前後からである。それら研究は、古典歌謡の社会的脈絡での解釈(Douglas 2001)や人類学的な調査(Ward Keeler 1998)が主であり、古典歌謡の実技訓練を受け、古典韻文を読み解き、作品の構造を明らかにしようとする研究はほとんどない。

以上のいずれの研究にも共通している問題は、古典歌謡を取り巻く状況についての分析を主としており、歌謡作品そのものを分析した研究がなされていないことである。また、歌謡は豊富な文献資料を有するにも関わらず、そのアクセスと利用の困難さから、これまでの研究者によっても十分な資料調査が為されていない。

上記のような研究史に対し、報告者は先に挙げた科研費研究において現地語一次資料の調査・発掘及び音楽の体得的訓練と記録から、

ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成過程を明らかにしてきた。さらに、文書の中で伝えられる音楽の側面と口承で伝えられる側面について分析を行ってきた。特に歌謡集の中で伝えられる側面である歌詞とジャンル分類による演奏形式の指示について明らかにし、口頭伝承については報告者の体得的な研究から分析を行ってきた。

上記の研究成果を踏まえて、伝承の歴史と実態に研究の主眼を置くと、口頭伝承や暗記を中心とする伝承の特徴が新たな創作を生み出しているという仮説を立てるに至り、伝承実態の詳細な研究をすべく本研究を開始した。特に本研究では、報告者が撮影を続けてきた、豎琴奏者故ウー・ミンマウンの手書きの楽譜の整理と分析を中心に作業を行うことを意図した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ビルマ国文学の核であり、伝統芸能の基盤である「タチンジー(大歌謡)」と総称されるビルマ古典歌謡の伝承と創作の関係を明らかにすることである。

具体的には、特定の師と弟子の間で実践されている手書き楽譜を用いた教授法の分析を行う。国を代表する音楽家であり豎琴奏者であった故ウー・ミンマウンは膨大な量の手書き楽譜を残しており、また伝統的な口頭伝承を用いつつも、それら楽譜を用いた教授法の確立に努めた。

ウー・ミンマウン亡き後は彼の妻でありやはり著名な豎琴奏者であるドー・キンメイが残された楽譜を用いて教授を行っている。彼女の教授法は自身の記憶の拠り所として楽譜を用いながら、教授自体は口承で行うというスタイルである。

本研究では、ウー・ミンマウンの手書き楽譜の撮影・整理及び教授法について記録と分析を行う。さらに、暗記を中心とする伝承の中で新たな創作が生まれる様子をウー・ミンマウンの楽譜の中に見出し、それを提示する。

3. 研究の方法

本研究の方法は主として以下の四つに分類できる。

(1) 申請者がこれまでの科研費による研究で調査・撮影を進めてきた貝葉・折り畳み写本の一次資料の分析を行う。これについては、特に貝葉文書「モンユエー僧正の古い歌謡集」(ミャンマー国立図書館所蔵、請求番号 NL 3149)を分析し、口頭伝承手段である口唱歌の記録されたテキストを分析した。

(2) 文書に記録された歌謡の歌詞の読解と分析を進めることで、書承の構造を明らかにする。ビルマ古典音楽の伝承には、口頭で伝えられる部分と書かれて伝えられる部分がある。書かれて伝えられるものは何かについて、歌詞を掲載した貝葉文献、出版された

歌謡集の分析を行った。

(3) 音楽伝承の基本である口頭伝承の仕組みの分析及び 20 世紀以降に作成された様々な形式の楽譜の調査・収集と分析を進める。具体的には報告者がこれまで調査・撮影してきた故ウー・ミンマウンの楽譜の撮影をさらに進めると共に、撮影済みの楽譜画像を整理しデータベース化した。

(4) 故ウー・ミンマウンの妻であり優れた豎琴教師であるドー・キンメイの元で古典歌謡の実技の訓練を受ける。具体的には、毎年約 1 か月間ドー・キンメイの元に滞在し、口頭伝承による曲の教授を受けた。徹底的な暗記と訓練に基づく曲の習得に努め、その中で口頭で伝承されるものと書かれたもので伝承される部分の体得的理解に努めた。

以上の四つのうち、(3) は本研究の要の作業であり、ウー・ミンマウンの手書き楽譜、撮影画像にして 3000 枚以上の資料を整理した。ウー・ミンマウンは弟子に教える際にその都度手書きで楽譜を記しており、書く度に異なるバリエーションで書いたと言われ、同じ曲のバリエーションを多数記している。これらを整理しながら曲数を数え、現在のジャンル分類に即して仕分けし、年代ごとの特徴やウー・ミンマウンが独自に作成した楽譜の記号などを明らかにした。また、ウー・ミンマウンの楽譜における同一曲のバリエーションを整理する中で創作の様を見てとることができた。

さらに(4) も報告者の研究の柱となる作業である。報告者はビルマ古典歌謡の歌唱と豎琴演奏の実技の訓練を 1999 年以降 18 年あまり受けている。この間、師による伝承方法の違いや時代変遷による教授法や習得法の変化等についても記録を行ってきた。

以上の作業によって、歌謡の創作と伝承が連関している様を明らかにした。

4. 研究成果

報告者は研究期間中に現地調査を 4 回実施し、報告者が平成 22-25 年度の科研費(若手研究(B))で実施した、豎琴奏者故ウー・ミンマウンの手書き楽譜の調査・撮影を、ウー・ミンマウンの家族の協力を得て引き続き進めた。さらに、撮影した手書き楽譜のデータベース化を進め、楽譜の収集と撮影、伝承の実態の記録と分析を行った。これまでの撮影分と合わせ合計約 3200 枚の楽譜画像を撮影した。それらのデータベース化と分析を行い、楽譜をジャンルごとに分類し、同一曲のバリエーションを整理した。

ウー・ミンマウンの妻であり豎琴奏者でもある著名な指導者のドー・キンメイの元に毎年滞在し、口頭伝承による指導実践を受け、口頭伝承の体得的理解に努めた。またドー・キンメイの教授法の記録の他、ウー・ミンマウンの教授法についてインタビューを行い、1960 年にアメリカの民族音楽学者である

ジュディス・ベッカー氏との出会いから五線譜を知り、学んで取り入れたウー・ミンマウンの業績を記録・整理した(研究業績〔雑誌論文〕、〔学会発表〕、〔図書〕)。

上記の作業に基づき、書承と口承の組合せによって伝承が為される様とその方法について明らかにし、伝承の中で新たな創作が為されている様についても提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Sayuri Inoue, 2014. "Written and Oral Transmission of Burmese Classical Songs," *The Journal of Sophia Asian studies*, 32, pp. 41-55, 2014 年 12 月、(査読無)

〔学会発表〕(計 6 件)

Sayuri Inoue, "Musical Notations and Oral Tradition in Myanmar Classical Songs: Harpist U Myint Maung's Notations and Its Transmission System," 2nd International Conference on Burma/Myanmar Studies, 於: ミャンマー・マンダレー大学, 2018 年 2 月 17 日。

Sayuri Inoue, "Musical Notations in Burmese Classical Songs' Oral Tradition: Harpist U Myint Maung's Challenges in Transcribing Music," 44th International Council for Traditional Music, 於: アイランド・リムリック大学, 2017 年 7 月 18 日。

井上さゆり「ビルマの近現代歌謡 メディアを通して生まれる歌謡」, 東南アジア学会第 95 回研究大会, 於: 大阪大学, 2016 年 6 月 5 日。

井上さゆり「ビルマにおける音楽評論 1940~90 年代の音楽雑誌・書籍の分析を通して」, ビルマ研究会 2015 年 4 月 18 日 於: 広島大学。

井上さゆり「ビルマの近現代歌謡と現代の演奏」, 国立民族学博物館共同研究「東南アジアのポピュラーカルチャー」, 2014 年 10 月 11 日。

Sayuri Inoue, "Interpreting Burmese Music from the 1920s to the 1990s," International Burma Studies Conference 2014, 於: シンガポール・Pan Pacific Singapore Hotel, 2014 年 8 月 1 日。

〔図書〕(計 3 件)

(共著) 井上さゆり 2018. 「第 9 章メディアから生まれるポピュラー音楽 ミャンマーの流行歌謡とレコード産業」福岡まどか・福岡正太編著『東南アジアのポピュラーカルチャー アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート, pp. 302-329。

(共著)井上さゆり 2016.「コラム6 ビルマの豎琴」『ミャンマー 国家と民族』, 阿曾村邦昭・奥平龍二編著, 古今書院, pp. 227-229。

(共著)井上さゆり 2014「第12章ミャンマーの芸能、口承と書承によって伝えられる芸能」赤松紀彦編『アジアの芸術史 文学上演篇 朝鮮半島、インド、東南アジアの詩と芸能』, 京都造形芸術大学・東北芸術工科大学出版局・藝術学舎, pp. 145-155。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

井上 さゆり (INOUE, Sayuri)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：40447503

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()